

流域委員会委員長 松本 誠 様 2006.7.26.

委員 法西 浩

いろいろとお世話になりありがとうございます。下記に意見書を提出します。
ご検討をお願いします。

意 見 書

河川学はあるのか？

河川学はあるのか。実はない。河川工学は存在する。流域委員会は、河川工学にもとづいて、武庫川の治水を議論している。さて、この河川工学はしっかりした学問なのだろうか。その運用に問題があるのか。考えるに、河川学がなく、治水と利水の問題を解決するための学問としての河川工学だけが発達したからだろうか。

河川は海に注ぐ。では海には学問があるのだろうか。答えはイエスである。海洋学がある。海洋学には、海洋気象学、海洋地質学、海洋生物学、海洋化学、海洋物理学の5つに分かれている。海洋学が発展を続けてきた^のもとになったのが、生態学と環境学が位置づけられたからである。そのために、海洋学が国際的に体系づけられた学問として、世界の海洋に関連した諸問題を解決してきた。

1997年新河川法のもとに、治水と利水に環境が加えられた。環境が加えられた背景については、ここでは述べない。環境が加わると、環境学と生態学が論じなければならなくなった。環境学と生態学が必要になると、それを統一してまとめる河川学を体系づけなければならなくなった。それを体系づけるには、倫理学が必要である。その倫理学を担うのは、私は住民の総意と考える。住民が中心となる以上、地域の特性が生かされなければなりぬい。河川にも地域特性（地域の顔）がある。

武庫川の河川学は必要なのか！

武庫川流域委員会は、武庫川委員会ではない。今、治水は河道内だけでは解決できなくなってきた。つまり、総合治水でなければならなくなった。治水は、流域全体で治水を考えなければならない。だから、流域委員会でなければならない。

今、新河川法で、環境を考えに入れなければならない。環境学と生態学を加えて考えることが必要となった。つまり住民の総意によって、武庫川の治水を考えなければならない。従来の河川工学に環境学、生態学を加えた河川学をつくらなければならない。武庫川には地域特性があるので、その河川学は、武庫川河川学、武庫川学でなければならない。その住民の心が問題になる。つまり、倫理学が根底になければならない。

流域委員会が、総合治水の提言書をつくる際には、環境学、生態学、倫理学を踏まえた武庫川学が求められる。総合治水の提言書を、両翼から支える2つの重要な提言書がつくられようとしている。それは「まちづくりWG」と「環境WG」の2つの提言書である。この2つの提言書が、行政に十分に活用されなければならない。これが活かされなければ、提言書は骨抜きになってしまう。誠に遺憾である。

7月10日の流域委員会では、流域7市とヒアリングをした。下流4市からは、その内容には、環境学、生態学はみられなかった。1市からは、親規ダム建設は不要、流域委員会の提言書には全面的に尊重すると発言された。流域委員会の提言書が県のパブリックコメントに十分に活用されることを祈る。

河川工学、水文学が危い！

私たちは、河川工学、水文学にお世話になって治水を議論している。しかし、何か異和感があるように思う。その運用面に問題があったのだろうか。

- 1つ目 基本高水流量は最尤値が求められたのだろうか。
- 2つ目 流量を計算する粗度係数をめぐって、水文学の学者の間で、意見の対立がみられる。
- 3つ目 穴あきダムは、治水に対して、安全かつ有効とされるのだろうか。
- 4つ目 流域全体の治水のあり方（方策）が十分に述べられていない。どうしてだろうか。

以上は、武庫川流域委員会だけが問題になっているのだろうか。他の流域委員会では上記のような問題は起っていないのだろうか。多くの方々からの意見がほしい。

武庫川の戦略的環境アセスメントの評価

7月4日 武庫川流域環境保全協議会 主催 三橋弘宗 氏の「武庫川流域における戦略環境アセスメント」と題した講演会を聞いた。たいへん盛会だった。兵庫県は、戦略的環境アセスメントを適応する時代を迎えるようになったことを嬉しく思う。